

本論文の課題は、ハイデガーの哲学を「時間性」という主題への一貫した取り組みとして明らかにすることで、この哲学の根本問題を「根源」と「派生」の問題として浮き彫りにし、その問題の解決を「媒介」という概念を用いて提示することにある。

この課題を遂行するにあたり、本論文は次のことを試みる。まず、第一部において、『存在と時間』を中心とする一九二〇年代後半のハイデガーの諸テクストを読解し、そこで彼が「時間性」という単一の「根源」から、通俗的時間概念の基礎である「時間内部性」と、通俗的歴史概念の基礎である「歴史性」を、それぞれどのように「派生」ないし「演繹」しているのかを解明する。そのうえで、時間内部性の派生は「根源的自然」という限界に突き当たり、歴史性の演繹は「根源的歴史」という限界に突き当たるということ、またこれらの限界が「時間性」と「時性」という「根源的時間」の脱自的・地平的な二つの側面のあいだの不一致を引き起こしているということを示す。次に、第二部において、ハイデガーの時間性の哲学を各々批判的に継承している、レヴィナス、リクール、デリダの諸テクストを読解する。それによって、三者がともに、ハイデガーにおける時間性からの時間内部性の派生に異議を唱えることで、根源的歴史という別種の根源によって両者を媒介する必要があると主張していることを明らかにする。

第一部はさらに、次の四つの章からなる。第一章では、『存在と時間』第二編第六章の課題である、時間内部性の派生についてのハイデガーの記述を、第二章では、同書第二編第五章の課題である、歴史性の演繹についての彼の記述を検討する。第三章では、刊行されなかった同書第三編の課題である、時間性と時性の関係についての探究を考察する。以下、各章の内容をより具体的に示す。

第一章の表題は「時間性と時間内部性」である。ハイデガーは、現存在が「それである」時間性から、世界内部的存在者が「そのうちにある」時間内部性を派生させようとしている。この派生の内実を明らかにするために、まず、(1) 時間性と通俗的時間概念の相違を明確化させる。時間性が現存在の有限的な「脱自」であるのに対して、通俗的時間概念は無際限の「今継起」である。次に、(2) 通俗的時間概念の根源としての時間内部性を、ハイデガーがいかに時間性から派生させようとしているのかを見極める。彼はこの派生を、第一に、現存在の頽落に起因する「水平化」によって、第二に、時間性に属する「世界時間」に関して現存在が行なう脱世界的な解釈によって、引き起こされるものと説明している。続いて、(3) 時間性と時間内部性とのあいだを媒介しているこの「世界時間」の本質的な諸性格（日付可能性、緊張性、公開性）を考察する。その際また、ハイデガーが、太陽や月といった自然的存在者を、もっぱら現存在がそれを使って日付をつけるための道具として、つまり世界内部的存在者として分析することで、それを世界の内部へと還元しようとしていることを

示す。そのうえで、実際には、そうしたハイデガーの意図に反して、自然を世界へと、また自然時間を世界時間へと還元することができないということ、とりわけミシェル・アールの批判の検討を通じて指摘する。以上のことから、(4) 時間性からの時間内部性の派生が「隙間のない」ものとして示されるには、両者を媒介している世界時間へと自然時間を還元できなくてはならないが、或る種の根源的自然がそのような還元抵抗するがゆえに、その抵抗によってこの派生は限界づけられているということが明らかとなる。

第二章の表題は「時間性と歴史性」である。ハイデガーは、現存在が本来的に「それである」時間性から、同じく現存在が本来的に「それである」歴史性を演繹しようとしている。派生の一種とみなされうるこの「演繹」の内実を解明するために、まず、(1)「本来性」と「非本来性」の区別を確認し、ハイデガーがこの区別を「根源」と「派生」の区別として、しかも二者択一的な可能性として提示しようとしているということ、しかし実際には、これらは互いに切り離しがたく結びついた等根源的な二つの根本可能性であるということ、これを明らかにする。次に、(2) 本来性と非本来性に対して無差別的な現存在の根源的構造としての「気遣い (Sorge)」（実存性・事実性・頹落性）を取り上げ、この気遣いの意味として解明される「根源的時間性」（将来・既在性・現在）が、ただ「本来的時間性」という具体的様態を通じてのみ可視的となるということ、さらに気遣いとその構成諸要素を統一している自己の自立性との双方を、根源的時間性が可能にしていることを示す。続いて、(3) 「本来的時間性」（先駆・取り戻し・瞬間）と「非本来的時間性」（予期・把持・現在化）の区別を明示したうえで、「本来的現在」としての「瞬間」の規定と、根源的時間性における「将来」の優位という主張とのうちに含まれた問題点を指摘する。前者の問題点は、ハイデガーが本来性を純粋な自己関係性とみなす一方、脱自態としての現在を、他者関係性を構成する働きとみなしているがゆえに、本来的時間性のうちにこの現在の占めうる場所はなく、したがって本来的現在としての「瞬間」は空虚な規定に留まっているという点にある。後者の問題点は、彼が将来と既在性を、いずれも自己関係性を構成する二つの契機とみなしており、しかも両者はつねに一体であると主張しているため、なぜ将来が既在性に対して優位にあると言えるのかが不明瞭であるという点にある。それから、(4) 以上で明らかとなった本来的時間性という時熟様態に基づいて解明される「歴史性」を、ハイデガーがどのように根源的時間性から演繹しようとしているのかを考察する。それにより、歴史性を一方で時間性と同一視しつつ、他方でそこから演繹しようとするハイデガーの試みは、時間性には根を下ろしていないが歴史性には根を下ろしているような「言語」が発見されるがゆえに、この言語の根である根源的歴史によって限界づけられているということが示される。彼はこの「言語」を、現存在によって語り出された世界内部的存在者とみなすことで、そうした世界内部的存在者との交渉を可能にする現在に基づくものとして分析しているがゆえに、語りの本来の様態を、そうした言語の不在としての「沈黙」によって特徴づけざるをえないのだが、この「沈黙」もまた、先に考察した「瞬間」と同様、空虚な規定のままに留まっている。最後に、(5) 第一章で示された時間内部性の派生の限界と、第二章で示された歴史性の演

繹の限界とによって引き起こされた、『存在と時間』の「挫折」と「転回」の意味を検討する。これらはいずれも、一九三〇年代以降のハイデガーが、それ以前の自身の時間性の理論を放棄したということの意味しているのではなく、この理論において問題となっていた、存在と時間の根源的連関を、現存在と時間性の連関として問うのとは別の仕方、すなわち存在と時間の「と」を規定する「性起」として問うようになったということの意味している。

第三章の表題は「時間性と時性」である。この章では、未刊に留まった『存在と時間』第三編の議論を、同時期の彼のいくつかの講義草稿の読解を通じて再構成することを試みる。ハイデガーはこの課題を、存在論の存在者の基礎の探究としての「メタ存在論」によって、また「超越」という主題への取り組みを通じて仕上げようとしていた。そこでまず、(1) ハイデガーがそれによって自身の基礎存在論を補完しようとしていた、メタ存在論の意図と内実を明るみに出す。次に、(2) このメタ存在論の中心主題である「超越」の意味を明らかにし、それが時間性とどのような関係にあるのかを考察する。この超越は、「全体としての存在者」のただなかにある現存在が、それによって「世界内存在」となるような、存在者そのものから世界への現存在の乗り越えを意味している。そしてこの超越は、それによって現存在が世界のうちへと脱自する時間性の時熟と同時に起こるが、ハイデガーは「時間性が超越を可能にしている」とも主張しており、超越と同時に起こる時間性の時熟と、超越の可能性の条件である時間性そのものが区別される。そのうえこの超越の一局面である「世界進入」を、ハイデガーは「原歴史」とも呼んでいるがゆえに、時間性が超越を可能にしているというこの主張においてもやはり、歴史性に対する時間性の先行性という前提が見出され、いまやそのように歴史性に先行する時間性が時性として明らかになる。続いて、(3) 超越との関係において眺められた時間性を、さらに時性との関係において考察することを試みる。時性は、時間性と異なる現象ではなく、その翻訳にすぎないが、ただし「存在了解の可能性の条件」として主題化されるかぎりでの時間性を指示している。しかしながら、ただ時性のみが存在了解を可能にしているわけではなく、「自然」や「言語」もそれなりの仕方、存在了解を可能にしていると考えられるため、ハイデガーが「時性」と名づけるものの中には、時間とはかかわりのないこれらのものも一緒に含まれており、それらが「時間性」と「時性」とのあいだに不一致を引き起こしているということが示される。以上のことから、ハイデガーの主張に反して、時間性は時性ととも同じ一つの根源的時間という現象をなしているのではなく、両者をつなぐために、なお根源的歴史による媒介が必要であるということが明らかとなる。かくして、以上の理由により仕上げられないままにとどまった時性の問いを、ハイデガーはカント哲学の解釈を通じて仕上げようとしており、この解釈を考察することが、残る三つの節の課題となる。そこでまず、(4) このカント解釈を検討するために必要となる、いくつかの基本的前提を確認する。主に『純粋理性批判』を対象とするこの解釈は、当時権勢を誇っていた新カント派による悟性中心主義的な解釈に反して、フッサール現象学からの影響を受けた、図式機能の章を頂点とする構想力中心的な解釈として提示されており、そのように解釈されたカントの認識論的な課題を、ハイデガーは自身の基

礎存在論 - メタ存在論構想のうちで存在論的に捉え直そうとしていた。そこでこの解釈の概略を示すため、われわれは、(5) 根源的時間性としての超越論的構想力の解釈という局面を取り上げる。この解釈によってハイデガーは、純粹直観(時間)と純粹思考(統覚)の双方の根底に、超越論的構想力による純粹綜合の働きを認め、その働きを根源的時間性の時熟の働きとして明らかにすることで、感性と悟性とを統一的に基礎づけようと試みていた。最後に、(6) 時間の自己触発についてのハイデガーの解釈を検討する。彼は、自己を触発することでその自己同一化を可能にしている時間を「時性」として解釈しており、それゆえまさにこの解釈によってカントは、時性の問題圏へと足を踏み入れていると主張する。しかし、このように自己同一化の根拠を時性に帰すことによってハイデガーは、この自己同一化において根源的歴史が果たす媒介的機能を主題的に探究せずにとどまっているがゆえに、結局のところこのカント解釈においても、時間性と時性とのあいだの隙間は埋まらないままである。

第一部全体の総括として、次のことが示される。すなわち、第一章で解明された時間性からの時間内部性の派生と、第二章で解明された時間性からの歴史性の演繹のそれぞれが或る限界をもっており、それらの限界が、第三章で確認された、時間性と時性とのあいだに隙間を空けている。そしてこの隙間を残しつつ両者を結びつけるためには、時間性という単一の根源から時間内部性と歴史性を等根源的に派生させるのではなく、時間性と時間内部性という互いに隙間なしには派生不可能な二つの根源を、語りや言語がそこに根を下ろすような根源的歴史によって媒介する必要がある。

そこで第二部では、この根源的歴史による媒介を、レヴィナス、リクール、デリダそれぞれのテキストの読解を通じて明確化させることを試みる。この第二部も四つの章からなる。第一章ではレヴィナス、第二章ではリクール、第三章ではデリダのテキストを取り上げ、三者がそこでハイデガーの時間性の理論をどのように批判的に解釈しているのかを検討する。最後に、これらのハイデガー解釈を互いに比較することで、三者がともに、ハイデガーにおける時間性という根源の単一性と自己完結性を問題視するとともに、歴史性の根源的性格と媒介的性格を強調しているということを明らかにする。以下、各章の内容をより具体的に示す。

第一章の表題は「ハイデガーとレヴィナス」である。ここではまず、(1) 論文「ハイデガーと存在論」の読解を通じて、レヴィナスが『存在と時間』におけるハイデガーの「存在論主義」をどのように批判しているのかを明らかにする。この「存在論主義」批判は、ハイデガーが超時間的なものや非時間的なものをすべて時間性の諸様態へと還元することで、そのような時間性によって可能になる存在了解へと、他人との一切の存在者的な関係を還元しようとしているという点へと向けられている。次に、(2) レヴィナスによるハイデガーの「存在」と「存在者」の区別の批判的継承を考察し、そのいずれとも区別された「イリヤ」という概念の内実を、レヴィナスのハイデガー読解の筋道に沿った仕方で解明する。このイリヤは、存在者なき存在として、あらゆる存在了解および共存在に先立って現存在がそ

のただなかへと孤独に投げられているところの「ある」という事実の水準を指しており、ハイデガーの用語では「全体としての存在者」の水準に対応する。それから、(3)『時間と他者』と『存在から存在者へ』において展開されるレヴィナスの時間論が、ハイデガーの時間性の理論との対決を通じて仕上げられているということを示す。これらの著作のなかでレヴィナスは、ハイデガー的な現存在による外への「脱自」としての超越解釈のうちでは思索されないままにとどまっているような、他人による外からの働きかけによって時熟する主体の「実詞化」を主題化している。最後に、(4)レヴィナスのハイデガー解釈を検討することで、レヴィナスがそこで指摘していた、実詞化において自己を倫理的・社会的な主体として構成する他人からの働きかけが、後の『全体性と無限』において「言葉」や「対話」として具体化されているということを示す。こうした他人からの働きかけこそが、自己と他人とを対話的關係において媒介的に時熟させるのであるが、この働きかけは、根源的時間を単に現存在の脱自の働きとみなし、しかも純粹に自己を触発するものとみなしているハイデガー的な解釈のうちでは主題的に探究されていない。

第二章の表題は「ハイデガーとリクール」である。ここではまず、(1)『時間と物語』の読解を通じて、リクールがそこで『存在と時間』における時間性・歴史性・時間内部性の水準の位階化に着目し、歴史性のもつ媒介的機能を強調しているということを示す。それからまた、同書の「時間性のアポリア論」と題する章を読解することで、そこにおいてリクールが、ハイデガーによる時間内部性の派生が、宇宙的時間と現象学的時間とのあいだの断絶を埋めることができず、「時間性のアポリア」に直面しているということ、そして思弁的には解決不可能なそのアポリアにはただ、物語制作によって提示される詩的解決のみがありうると主張しているということを示す。次に、(2)『過ちやすき人間』と『時間と物語』におけるカントの構想力に関する解釈の読解を試みる。リクールは、構想力を時間性との関連において解釈するハイデガーに反して、構想力を歴史性ないし物語性との関連において解釈することで、それを感性と悟性の「共通の根」ではなく、両者の「媒介項」とみなそうとしている。続いて、(3)『他者のような自己自身』における「物語的自己同一性」についての議論を概観することで、彼がハイデガー的な「異他性」ともレヴィナス的な「外部性」とも部分的に区別された「証しとしての命令される存在」という他性の第三様態を提示しているということを確認する。最後に、(4)リクールのハイデガー解釈を検討する。それにより、この解釈の重要な成果が、ハイデガー的な「派生」という手続きに反して「媒介」という手続きを明確に導入し、その媒介を「歴史」や「物語」といった主題の探究を通じて明らかにしようとした点にあるということが示される。

第三章の主題は「ハイデガーとデリダ」である。ここではまず、(1)ハイデガーとデリダ双方の戦略の共通点と相違点を、ハイデガーにおける「解体」および「克服」と、デリダにおける「脱構築」との比較を通じて明らかにする。解体や克服が、形而上学の根底への帰り行きとして、その伝統のなかで隠蔽されてきた存在の根源的経験の取り戻しを意図しているのに対して、脱構築は、解体と同様、形而上学の伝統に揺さぶりをかけるものの、解体

とは異なり、その背後にいかなる取り戻し可能な根源も控えていないということを肯定することで、その根源を「差延」として示すことを意図している。次に、(2)「ハイデガー」講義におけるデリダの『存在と時間』読解の考察を通じて、彼がそこで「時間性への歴史性の根付き」を問題視するとともに、歴史性に固有の概念としての「自己伝承」を「自己触発」の別面とみなしているということを確認する。自己触発が根源的時間の時熟であるのに対して、デリダによれば、自己伝承は根源的歴史の生起であり、この自己伝承は、歴史性を時間性から演繹しようとするハイデガーの試みにおいてはそのものとしては思索されないままにとどまっている。続いて、(3) この自己伝承としての根源的歴史の生起が、後にデリダが「差延」と呼ぶことになるものの実質をなしているということを明らかにする。そのためまず、ハイデガーが「現前性の形而上学」にとらわれているとするデリダの指摘の趣旨を、論文「ウーシアとグランメー」の読解を通じて考察し、その指摘が特に「時間性」や「時性」といった「時間」をうちに含む名称に向けられているということを示す。そのうえでデリダが、これらの名称によっては思索されないままにとどまっている根源的歴史を、まさに「差延」と名指そうとしているということを示す。最後に、(4) デリダのハイデガー解釈を検討する。デリダは、ハイデガー哲学において支配的な「根源」と「派生」の区別を撤廃し、それを「差延」と「痕跡」の区別に置き換えることによって、「媒介」の哲学のための礎を築いた。差延は、時間性や性起と同様、時間を可能にする働きであるが、それらとは異なり、そのうちへと他の一切が取り集められる単一の根源ではない。他方で痕跡は、その背後に取り戻し可能ないかなる根源も控えていないがゆえに、単なる派生態ではなく、とりわけ言語や記号がそれであるような、それ自体として第一次的な歴史の所産である。

第二部全体の総括として、そこで考察されてきた三者のハイデガー解釈を互いに比較する。まず、それらの共通点を、歴史の根源性の強調、語りや言語の問題への注目、将来の優位の問い直しという三点に要約する。次に、それらの相違点を、課題の相違、外部性の解釈の相違という二点に要約する。その結果、ハイデガーの時間性の哲学において主題的に探究されていない根源的歴史の媒介的性格を、レヴィナスは「他人からの働きかけ」として、リクールは「物語」として、デリダは「自己伝承」ないし「差延」として、それぞれ具体的に示そうとしていたということが明らかとなる。この性格を指摘することで三者はともに、ハイデガー的な根源的時間の単一性と自己完結性に抗して、根源的歴史に場所を与えようと試みている。

最後に、本論文は以下をもって全体の結論とする。すなわち、ハイデガーの時間性の哲学の根本問題は、時間性と時間内部性であれ、時間性と歴史性であれ、あるいは本来性と非本来性であれ、それらがいずれも「根源」と「派生」の関係において展開されているという点にあり、この問題を解決するには、時間性という単一の根源から他の一切を派生させるのではなく、時間性と時間内部性ととのあいだをとりもつ「媒介」として歴史性を解釈する必要がある。そしてこの歴史的な「媒介」という点に注目して再構成されるならば、ハイデガーの時間性の哲学はなお「挫折」や「転回」とは異なる新たな道へと開かれうるように思われる。